

佳作

宝箱の中には

鹿児島県 鹿児島市立石谷小学校五年 里 菜々実

私にはちょっと年上の友達がいる。私が生まれる前からのおとなりさんだ。だから、家族同様に家に入り込んでいる。ユリちゃんと言っているその人は、手芸が得意で人の役に立ちたいと思っているような、あたたかさをもっている。私が遊びに行くと、いつも優しくむかえてくれる。そして、ユリちゃんとも私をむかえてくれる物たちがいる。

「そんなに気に入ったのなら、小物の箱を作ってみる。」

いつものようにユリちゃんの家にかざってある手作りのかわいい小物たちにみとれていた私に、ユリちゃんの声がかかった。かわいい小物にあこがれていたが、今までそんなことを考えていなかった。そう、自分でも作れるかもしれない。そう思ったとたん、ユリちゃんの前でとびはねていた。

まずは作戦会議。何を作るのか、どのくらいの大きさにするか、どんな材料があるのか。ユリちゃんのアドバイスにしたがって、手順も確かめた。よし、イチゴの宝箱、最高の仕上がりにするぞ。

まずは土台になる箱を作る。大切な物をしまいう箱だから、ふたをつけて、カギも必要だ。大きさを測って接着剤でつけて、ふたはちょうつがいですなぐ。ところがこれがむずかしい。どうすればとなやんでいると、おじちゃんが手伝ってくれたので、無事終了。これで箱は出来上がり。

次はいよいよふたをかざるイチゴを作ることになった。初めに使った粘土では、くずれてしまっ上手くいかない。ため息をついていると、ユリちゃんが使っている樹脂粘土を分けてくれた。すると、なめらかでひびわれのないイチゴができた。「これをもっといい作品にしたい」細かい部分は集中して、息を止めるようにして進めていった。さらにイチゴの花やつるも作り、かんそうさせる。これだけでももう宝物のようだ。

かんそうするまでには時間がかかるので、次の作業は土曜日になった。

「どこがいいかな。」

「この辺りにこんな風に置いたらどう。」

私たちは何度も顔を見合わせては、何度もイチゴをつけたりはずしたり。朝から大盛り上がりだ。バラバラだったパーツが集まり、少しずつ形になっていく。私とユリちゃんのアイディアが宝箱という形をとってすがたを現した。アクリル絵の具をつけていくと、さつきよりイチゴや葉っぱの色がきらきらして、本物のように光って見えた。

私は、「この宝箱が出来上がったら、何を入れよう」とずっと考えていた。せっかくだから、一番すてきな物を入れたい。ちょっと年上のユリちゃんという友達。二人でワクワクしながら宝箱を作った思い出を入れよう。それは目には見えないけれど、特別にピカッと光る宝物になった。